「ぅ…っ…♡…ぉ…っ、ぉねが……です……っ、達(い)……っ達……っっ、」

言葉も継げぬほどの狂おしさに、濡れそぼった下半身が弾(はず)むように振りたてられる。

「ふふ……なんてね」

「ぁッ！？♡っあぁあああ……ッッ！！♡♡♡♡」

ズルズルズル――ッッ♡♡♡
飾り串を一気に引き抜かれ、今度こそ大量に白蜜が噴き散る。
躰の奥深くから矢のように淫液が飛び出し、思考までもが白く飛ぶ。
放尿感をまとった、危険なほどの深い法悦。
大きな絶頂ののちも会陰と菊門をぎゅいぎゅい紐で責められながら、小刻みに意識を飛ばしては精を吐き出させられる――。

「さぁ、お仕置きの時間だ」

「こっちへおいで」

「……っぁ……」